第１章
空手道の歴史・特性・ねらい

本書の表記の仕方について

「空手」について

本指導書では、琉球に古来よりあったとされる武術「手(ティー)」と「中国拳法」が融合される歴史的経緯を踏まえて沖縄(琉球)で形成・体系化された空手を「空手」と表記する。

「形」と「型」の表記について

「空手」においては、相手を想定した攻防を表現する伝統的な動作を「形」または「型」として表記する。どちらを使用するかは先達者の意見も分かれており、現在でも議論の余地がある。本指導書では「空手道基本型」(5ページ 5 (6)参照)以外については、学習指導要領解説「F武道」に則り、「形」を使用する。

年号について

明治維新前までを中国年号、それ以降は日本年号を使用する。

沖縄方言について

カタカナで表記する。

第１節　空手道の歴史

1 琉球(りゅうきゅう)の歴史概略

四方を海に囲まれている沖縄は、琉球と呼ばれる以前の古い時代より、主に、採集・漁猟・狩猟生活を中心に生活していた(旧石器・貝塚時代)。11世紀末頃から農耕が伝わり集団での暮らし・生活が始まるようになると、各地の集団をまとめる「按司(あじ)」が出現し「グスク(城)」が形成された(グスク時代)。その頃、武術としての格闘術があったのかは定かではない。

14世紀には、浦添を中心とする「中山(ちゅうざん)」、今帰仁を中心とする「北山(ほくざん)」、糸満の島尻大里・南城の島添大里等を中心とする「南山(なんざん)」の「三山(さんざん)」と呼ばれる三大勢力が形成され、敵に対する攻防の技術の優劣が勢力図を塗り替えるきびしい時代が到来した。

1372(洪武５)年、中山の察度王(さっとおう1350-1405)が初めて中国(明)に進貢。その後、「北山」、「南山」も入貢。これ以来、諸外国との活発な交易が開始され繁栄していった。この頃より、武術の面でもいろいろと影響を受けるようになったことが推測される。

1429(宣徳４)年、尚巴志(しょうはし1372-1439)が、三山を統一し、首里城を中心とする「琉球王国」が誕生した。15世紀頃の那覇港には中国、東南アジア、朝鮮、日本などの商船や進貢船・山原船等が行き交い、さながら国際貿易港のような活況を呈していた(大交易時代14世紀後半～16世紀・下図参照)。

▶唐船図　沖縄県立図書館所蔵

▲中国冊封使行列図 部分　中国冊封使が首里城へ向かう様子。
沖縄県立博物館・美術館所蔵

▶首里那覇図　沖縄県立図書館所蔵

◀万国津梁(ばんこくしんりょう)の鐘(復元)
第一尚氏６代尚泰久(しょうたいきゅう1415-1460)王代の1458(天順２)年ころ、首里城正殿にかけられた鐘には以下のような銘文が刻まれている。
当時の琉球が、周辺諸国との「梁(かけはし)」となって繁栄していたことがうかがえる。

琉球國者南海勝地而	琉球国は南海の勝地にして
鍾三韓之秀以大明為	三韓(朝鮮)の秀を鐘(あつ)め、大明(中国)を以て
輔車以日域為唇歯在	輔車(ほしゃ)となし、日域(日本)を以て唇歯(しんし)となす
此ニ中間湧出之蓬莱	此の二の中間に在りて湧出する蓬莱島(ほうらいしま)なり
嶋也以舟楫為万國之	舟楫(しゅうしゅう)を以て万国の津梁(しんりょう)となし
津梁異産至宝充満十	異産至宝(他国の文物)は十方刹(国中)に充満せり
方刹地靈人物遠扇和	地は霊、人は物(ふ)え、遠く和夏(わか)の
夏之仁風	仁風(じんぷう)を扇(あお)ぐ

2「空手」の発生

「空手」の発生については、その性質上、門外不出・親から子への一子相伝、又は、師から弟子への口伝が主であり、「空手」に関する資料に乏しく、いつ発生し、体系化されていったのかいまだ不明である。「空手」の発生・形成過程については、現在の歴史考察上、次の３点から論じられている。

○ 琉球に古来よりあったとされる武術「手(ティー)」への14世紀頃から琉入した中国拳法の影響。(**注1**)

○ 中国との交流開始以降に琉入した中国拳法(**注1**)を琉球の歴史的・文化的風土の過程で形成。

○ 二度の武器などに関する政策(**注2**)などの様々な時代の影響。

このような背景を踏まえ、当時「手」は、中国拳法の影響を強く受け「唐手(トーディー)」と呼ばれた。

3「手(ティー)」

中国拳法と融合した「手」は、「唐手(トーディー)」と総称されていたが、1800年代末期頃まで、その形の特色、教習体系、伝承地名にちなんで、「首里手(シュイディー)」「那覇手(ナーファディー)」「泊手(トゥマイディー)」と呼称された。「唐手(トーディー)」の達人の一人に佐久川寛賀(さくがわかんが1786-1867)がいる。武士松村こと松村宗昆(棍)(まつむらそうこん1809-1899)はその弟子の一人である。

「手」についての文献資料も乏しく、その発展・形成過程はいまだ不明である。中国拳法と異なる点として「正拳(せいけん)」と「巻藁(マチワラ)」の2つが、沖縄「手」独特のものとされる。

「首里手(シュイディー)」

首里城を中心に首里士族の間で発達した。松村宗昆(棍)を中興の祖とする。糸洲安恒(いとすあんこう1831-1915)はその弟子の一人である。その系譜は、小林流へと受け継がれ、少林流・少林寺流が派生した。

「那覇手(ナーファディー)」

那覇西町を中心に久米・泉崎付近で行われた。新垣世璋(あらかきせいしょう1840-1920)、ルールーコウ(生没不明)に師事した東恩納寛量(ひがおんなかんりょう1853-1915)を中興の祖とする。その系譜は剛柔流へと受け継がれた。これとは別にルールーコウの系譜に劉衛流がある。

「泊手(トゥマィディー)」

泊方面で広く行われた。松茂良興作(まつもらこうさく1829-1898)を中興の祖とする。その系譜から松林流が派生した。また少林流系にも多大な影響を与えた。

4 沖縄の古武道

沖縄の古武道は琉球古武道又は沖縄古武道と呼称される。沖縄の古武道は元来独立した武道として発達したものではなく、「空手」と並行して発達してきたと考えられる。「棒・釵(サイ)・ヌンチャク・トンファー・エーク・ティンベー・スルチン・鎌・鉄甲」等を武具として用い、その使用法を網羅した「形」を有するところに特徴がある。古武道は「空手」と同様、中国拳法の影響を受けながら沖縄の歴史的・文化的風土の中で、武具を使用し、一定の様式「形」を備え、独自に発達した武術と定義することができる。

古武道の発生は「空手」とともに三山時代にその淵源を求めることができる。しかし、古武道が武術として一定の形式を伴い、「形」の成立をみるのは、

(注1)「空手」の発生一説

①14世紀後半中国拳法伝来・融合説

1372年、察度王が中国(明(みん))に初めて入貢し、中国と正式に貿易を始めた。それ以降、中国の武術家等が来琉し、中国拳法を伝え、琉球古来の武術「手」と融合したとする説。

中国拳法の琉入については、「久米(くめ)三十六姓帰化説」と「冊封使(さっぽうし)来琉説」等がある。

「久米三十六姓帰化説」

1372年から1879(明治12)年までの507年間にわたって、那覇の久米村(現・那覇市久米付近)に、当時の明の福建(ふっけん)省から下賜(かし)された「久米三十六姓」(又は「閩人(びんじん)三十六姓」)と呼ばれる職能集団が来琉。主として中国関係の官職に就き、王府から特別の保護を受けていた。彼らは琉球に先進的な学芸、技能等をもたらす中、中国拳法も同時にもたらされたとする説。

「冊封使来琉説」(p1図参照)

冊封使とは、琉球国王が王位に就くとき、中国から来て中国皇帝からの認証の冠を授けた使者のことで、1404(永楽2)年から1866(同治5)年まで462年間に23回行われた。使者は普通、正副2者あって数百人の護衛兵を従え、滞在期間も5ヶ月から9ヶ月に及んだ。冊封使の護衛兵士は腕の立つ武官が中心であったため、冊封が重ねられるうちに中国拳法の伝授があったとされる説。

②18世紀後半伝来説

冊封開始19回目となる1756(乾隆21)年に来琉した一行の武官「公相君」(こうしゃうきん:人名か職階身分の称号かは不明)が中国拳法を演武して、琉球の人々を驚かせている話が、土佐藩の戸部良凞(とべよしひろ)の「大島筆記」の雑話の中に表記されている。その後、「手」と中国拳法との融合が図られたとする説。

(注2)二度の武器などに関する政策

尚真王(しょうしんおう1417-1526)時代の軍備政策は地域等にあった武器等を中央(琉球王府)に集約したものであり、1609(万暦31)年、薩摩島津氏による琉球侵攻では、「新たな武器・武具移入禁止」「携帯禁止」であり、もともと所有していた刀剣などの武具の所持は許されていたことからすると絶対的な禁止令ではなかったようである。もともと、「手」は琉球王府士族の嗜み(たしなみ)として修行され、門外不出・親から子への一子相伝、又は、師から弟子への口伝といった性質が強く、当時は、一般民衆には広まらなかったようである。

形名に登場する人物たちが 18 世紀中期以降に活躍する武人であることから、近世中期以降と考えられる。
また、空手・古武道を合わせて「空手」とする流会派もあることを確認しておきたい。

5 廃藩置県後から第二次世界大戦前までの動き

明治維新後、政府は、当時の欧米列強のアジア進出・植民地化に対抗すべく、富国強兵政策の下、中央集権体制を強めていく。1871(明治４)に廃藩置県を実施し、1872(明治３)年の琉球藩設置後、1879(明治12)年には琉球藩を廃し沖縄県を設置(「琉球処分」・中国との冊封関係が終了)し、教育面も含め沖縄の本土化が図られ、1898(明治31)年には沖縄でも徴兵令が施行された。日本は、日清戦争(1894(明治27)-1895(明治28))、日露戦争(1904(明治37)-1905年(明治38)年)に勝利し、強国として発展していった。

(1)県内学校体育への「唐手(からて)」導入【大衆化】

糸洲安恒は、学校体育としての導入を目指し県学務課の指導の下、首里手の形から急所を狙うなど危険な技を除き修正した「唐手(からて)」を、1905(明治38)年、沖縄県立中学校において、初めて正課(科)体育として指導した。1908(明治41)年には、意見書「唐手(からて)十箇條」(糸洲十訓)を県学務課に提出。それ以降、運動会、学芸会等において唐手・古武術演武が盛んに行われていったようである。

▲ 1937(昭和12)年 指揮者：許田重発(きょだじゅうはつ1887-1968)
沖縄県立第二中学校全校生徒の集団練習

◀ 1937(昭和12)年 指揮者:城間真繁(しろましんぱん1891-1957)
首里城正殿前庭にて沖縄県立首里第一小学校児童による集団演武風景

(2)県外への指導・普及

大正から昭和初期にかけて多くの先達者が、関東・関西の大学を中心に普及指導を行った。

1916(大正6)年、富名腰(船越)義珍と又吉眞光(またよしししんこう 1888-1947)は、京都武徳殿で沖縄古来の武術として「唐手」「古武術」を日本初公開。富名腰(船越)義珍は1922(大正11)年、文部省主催第一回運動体育展覧会にて演武し、その後、東京に住み、1924(大正13)年、慶応義塾大学に日本初となる唐手研究会を創設するなど、関東の大学を中心に普及指導に努めた。1937(昭和12)年、宮城長順は大日本武徳殿において演武し、関西の大学を中心に普及指導を行った。1926(昭和元)年、上地完文は、和歌山県で沖縄県人会を中心に指導を行った。

(3)戦前の海外への指導・普及

糸洲安恒の弟子である屋部憲通(やぶけんつう 1866-1937)は、1919(大正８)年、体育視察のため渡米。８年滞在し、その帰路、1927(昭和２)年、ハワイにて指導した。1934(昭和９)年、宮城長順もハワイで指導。戦前の「空手」の国際化の端緒を切った。

(4)「空手(からて)」の呼称の始まり

「空手(からて)」の名称は、「手→組合術→拳法→唐手(トーディー)→唐手(からて)→空手(からて)→空手道」と時代的に変遷。「空手(からて)」と一般的に呼称されるのは、本土では1929(昭和4)年以降、沖縄では1936(昭和11)年以降のことである。

県内

① 1905(明治38)年、糸洲安恒の弟子である花城長茂(はなしろちょうも1869-1945)は、沖縄県立中学校にて「空手組手」と書いて指導。

② 1936(昭和11)年10月25日、「唐手座談会」(琉球新報主催)が那覇で開かれ、「唐手(からて)」を「空手(からて)」に改めた。

県外

③ 1922(大正11)年、富名腰(船越)義珍は、日本最初の専門書「琉球拳法 唐手」の中で「空手」と表記し、1929(昭和4)年には、自身創設の日本初の唐手研究所を「慶應義塾大學空手研究會」に改称した。

④ 1932(昭和7)年、上地完文は「パンガキヌーン流空手術研究所」と表記。

(5)「流派(りゅうは)」の命名

昭和初期に入り、本土の武道家に流派を問われるようになり「剛柔(ごうじゅう)流」「小林(しょうりん)流」「上地(うえち)流」「松林(まつばやし)流」「松濤館(しょうとうかん)流」「糸東(しとう)流」「和道(わどう)流」「劉衛(りゅうえい)流」といった「流派」が命名され始めた。

「空手」における流派とは、「空手」に対する理念、形、形の解釈、鍛錬法、教習体系などの創意によって分類された技法の系統である。

剛柔流（那覇手）
命名期 1930(昭和5)年頃
宮城 長順
みやぎちょうじゅん 1888-1953

小林流(首里手)
命名期 1933(昭和8)年頃
知花 朝信
ちばなちょうしん 1885-1969

松林流(首里手、泊手)
命名期 1947(昭和22)年頃
長嶺 将真
ながみねしょうしん 1907-1997

上地流
命名期 1940(昭和15)年頃
上地 完文
うえちかんぶん 1877-1948

松濤館流
命名期1938(昭和13)年頃
富名腰(船越) 義珍
ふなこしぎちん(1868-1957)

糸東流
命名期1934(昭和9)年頃
摩文仁 賢和
まぶにけんわ 1889-1952

和道流
命名期1938(昭和13)年頃
大塚 博紀
おおつかひろのり 1892-1982

劉衛流
命名期1944(昭和19)年頃
仲井間 憲孝
なかいまけんこう 1911-1989

【流祖顔写真提供】（写真掲載順・順不同）
沖縄剛柔流空手道協会　沖縄小林流空手道協会　世界松林流空手道連盟　上地流空手道宗家修武館
全日本空手道松濤館　全日本空手道連盟糸東会　和道流空手道連盟　沖縄劉衛流空手・古武道龍鳳会

(6) 県内における普及「空手道基本型(注３)」「普及形Ⅰ」「普及形Ⅱ」の創作

当時の「空手」は、初心者には技術の習得が難しく、普及の障壁となっていた。そのため初心者向けの平易な形の創作を目的として、1937(昭和12)年、沖縄県空手道振興協会による「空手道基本型」を正式に制定。続いて1941(昭和16)年、県知事によって空手道専門委員会が組織され、長嶺将真が「普及形Ⅰ」、宮城長順が「普及形Ⅱ」を創作し、同専門委員会が認定した。

しかし、その努力も第二次世界大戦突入により、学校体育における「空手」の普及指導は一時期途絶えることになった。

(注３)「型」表記については本項目のみ史実に基づく。

6 戦後の日本本土、世界への普及・発展と組織の編成

沖縄戦(1945)後、県内も経済的な復興が進む中、空手道場が増え、全県下へ普及していった。米軍統治下におかれた沖縄では、多くの米軍人等が道場で稽古を行った。彼らは、帰国後、各国にて道場を開き普及指導に努めた。また、多くの沖縄・本土の空手家も南米・欧州へと積極的に雄飛し普及指導が行われ、「空手」はいよいよ本格的に大衆化の時代へと変遷していった。

(1)「県内組織」の編成

① 1926(大正15)年設立「沖縄唐手倶楽部」は、1930(昭和５)年「沖縄縣立體育協會(おきなわけんりつたいいくきょうかい)」創立に伴い、1933(昭和８)年「大日本武徳會」の公認武道団体となった。

② 1956(昭和31)年、上地流・剛柔流・小林流・松林流の４流派によって「沖縄空手道連盟」(沖空連：初代会長 知花朝信)が結成され、その後1967(昭和42)年、８流派加盟の「全沖縄空手道連盟」(全沖空連 初代会長：長嶺将真)となる。

③ 1974(昭和49)年、沖縄県高体連空手道専門部は沖縄県高等学校体育連盟に正式認定され、1975(昭和50)年、全国高等学校空手道連盟に正式加盟した。

④ 1981(昭和56)年８月、沖縄県体育協会は、海邦国体(1987・昭和62年10月開催)を控え、「沖縄県空手道連盟」(県空連 会長：長嶺将真)を承認。

⑤ 1997(平成９)年、沖縄県中学校体育連盟空手道部が発足し、翌年４月、県中学校体育連盟に正式加盟。８月には第１回大会が開催された。

(2)「本土組織」の編成

① 1950(昭和25)年、学生を中心に組手の競技化が図られ、1957(昭和32)年「全日本学生空手道連盟」(会長：大濱信泉(注４)が結成された。

(注４) 大濱信泉(おおはまのぶもと189-1976)：石垣市出身、早稲田大学総長、沖縄海洋博協会会長、プロ野球コミッショナー等歴任。空手道の競技化に尽力

② 1964(昭和39)年には「全日本空手道連盟(会長：大濱信泉)」が結成され、「競技」ルールなどの統一化が図られた。

③ 1974(昭和49)年には全国高等学校空手道連盟が、また、1995(平成７)年には全国中学校空手道連盟が結成された。

(3)「世界組織」の編成

○ 1970(昭和45)年には「世界空手連合」が結成され、1993(平成５)年「世界空手連盟」と名称を変更。２年に一度の世界選手権など、数多くの競技大会等を主催している。

7 文部科学省による中学校体育への武道必修化

平成18年、教育基本法が改正され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が教育の目標の一つとして規定されたことに基づき、文部科学省は、平成20年３月、小学校、中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領を、平成21年３月、高等学校、特別支援学校の学習指導要領を改訂した。

その中で、武道については「その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する。」と述べられている。

これを受けて、平成24年度からは、中学校において武道が必修化された。柔道、剣道、相撲に加え、「地域や学校の実態に応じて、なぎなたなどのその他の武道についても履修させることができること」と示され、全国的な取り組みが始まった。

空手道実施校

2016(平成28)年度、空手道は、県外で98の中学校で実施(全空連調査)されている。沖縄県では、国公立・私立中学校156校(休校２校除く)中、133(国公立・県立130) 校で実施されており、県内全日制県立・私立高校63校中38(県立36) 校、県立定通制高校では８校中６校で実施されている。

▲港川中学校授業風景

▲西原東中学校授業風景

▲前原高校授業風景

8 2020 東京オリンピック・パラリンピック種目採用と沖縄県の役割

競技としては、1994(平成６)年にはアジアオリンピック広島大会に正式採用。2014(平成26)年８月世界空手連盟主催、日本初開催となる「空手１プレミアリーグ2014」を沖縄県那覇市で開催。オリンピックに向けての気運を高めた。

そしてついに、空手道関係者の永年の努力により、2016(平成28)年８月IOC総会の承認を受け、空手道を含む５競技が、2020東京オリンピック・パラリンピック種目採用決定となった。

これは、空手道関係者のみならず、沖縄県にとっても大変に誇らしく喜ばしいことである。それだけに、「伝統文化としての『空手』の保存・継承・普及」と「スポーツとしての空手道の普及・発展」のために、これまで以上に「**空手**」**発祥の地としての沖縄**の果たす役割は大きいと言える。

空手 五輪初採用

野球・ソフトも復活

発祥の地、県内に喜び

◀琉球新報社提供 2016年8月4日

沖縄空手 広がる夢

誇れる文化 子に継承

◀沖縄タイムス社提供 2016年8月14日

◀プレミアリーグ 2016 沖縄大会

空手歴史年表

時代	沖縄（琉球）		空手
鎌倉		・按司の出現 「グスク（城）」 ・三山　北山・中山・南山	琉球に古来よりあったとされる武術 「手（ティー）」
室町		・1372　中山、察度王が明進貢 ・1406～　第一尚氏 大交易時代	・1372～1879 久米（閩人）三十六姓帰化 ・1404～1866 冊封使来琉 ・門外不出、一子相伝による体系化。 ・士族のたしなみ。 ・手と中国拳法融合形成 ・中国拳法との交流
戦国	琉球王国 1429 ～ 1879	・1429　尚巴志三山統一 ・1458　「万国津梁の鐘」 ・1470～　第二尚氏	
安土桃山		・尚真王、中央集権国家作り	
江戸		・1609　薩摩藩島津氏琉球侵攻	
明治		・1871　廃藩置県 ・1879　沖縄県設置（琉球処分）	「唐手（トーディー）」 「首里手」「那覇手」「泊手」
	沖縄県 1879 ～		・1905　糸洲安恒　県立中学校に正課体育「唐手」採用　【大衆化】　「唐手（からて）」 ・1908　糸洲安恒　「唐手十箇篠」（糸洲十訓）県学務課に提出
大正			・1916　富名腰（船越）義珍と又吉眞光、京都武徳殿で沖縄古来の武術として「唐手」「古武術」本土初公開
昭和		・1939～1945 第二次世界大戦 ・1945 沖縄戦 ・戦後米軍統治 ・1972　本土復帰 ・1987　海邦国体	・流派の命名 ・1936　10 月 25 日「唐手座談会」（琉球新報主催）正式に「唐手」を「空手」に改めた。　「空手（からて）」 ・1937　「空手道基本型」 ・1941　「普及形Ⅰ」「普及形Ⅱ」 ・海外への普及、組織、学校体育　【大衆化】
平成			・2010　美ら島沖縄総体 ・2012　中学校体育、武道・ダンス必修化 ・2016　【2020 東京オリンピック・パラリンピック】種目採用決定

グスク・三山